

東アジア近代研究のパラダイムについて

— 安秉直教授に問う —

瀧澤 秀 樹

はじめに

本稿は拙著『歴史としての国民経済』（御茶の水書房、1996年）に対する安秉直教授の書評（『土地制度史学』158号、1998年1月）での批判に応えるために、「安秉直教授に敢えて問う — 拙著『歴史としての国民経済』を書評していただいたことへの謝意に替えて —」の題で韓国語で執筆した文章の、日本語訳である。韓国語の文章は、約30パーセント分量をカットし、一部表現を改めて韓国の学術誌『歴史批評』1998年夏号（歴史批評社、1998年5月）に掲載され、日本人研究者による「植民地近代化論批判」として『ハンギョレ新聞』（5月20日）、『教授新聞』（6月1日）その他で紹介されるなど、韓国ではかなりの反響を呼んだ。同じ問題を日本の学界に問うことも意味があると考えて、日本語訳の文章の本誌掲載をお願いした次第である。なお、ここでは『歴史批評』掲載にあたってカットした部分をもとの文章にもどして、本来執筆した全文を日本語訳した。安秉直教授に対する人格的批判の意味を含むものでないことを明確にするためには、こうする方がベターであると考えたからである。関連分野の多くの研究者から批判・反論が寄せられることを期待する。

1.

考えて見ると、私がソウル大学校経済学科の安秉直教授に初めておめにかかったのは、今から17年前の1981年の春であった。当時を思い出すとき、私は人間同士の縁というのは実に不思議なものだとあらためて感ずる。まだ韓国語が殆ど出来なかった当時、私が安秉直教授と会ったのは社会学科の愼鍾廈教授の紹介によってだったのであり、その愼教授を私に紹介していただいたのは当時〈解職教授〉だった高麗大学校歴史学科の姜萬吉教授だったのである。

民主主義や人権を基準としてみる限り暗黒時代だったとしか言えない〈維新時代〉に、〈間諜罪〉で刑務所暮らしをすることになった在日韓国人の友人を持ったことによって韓国に関心を持つようになった私であっただけに、拘置所や矯正所にいるその友人と面会するために韓国に行き来するようになってから、ソウル駐在の日本の報道機関の支局長の紹介で、当時民主化運動の先頭に立って活躍されていた人々（例えば故金韓林女史や桂勲梯先生、白基琓先生）にお目にかかる機会は時々あったが、大学教授のような狭い意味での学者とは直接会ったり対話する機会が特になかったのが事実であった。

韓国に対する私の関心が次第に拡大して、学問的に韓国社会や韓国の近現代史を研究したいと思うようになり、韓国語も独学で私なりに勉強をはじめたころ、至極自然に韓国の大学に留学してまさに〈現場〉の雰囲気の中で韓国社会を研究出来たらと考えるに至ったのであった。そんな希望を持って1981年の春にソウルを訪れた私が、姜萬吉教授の紹介で愼鍾廈教授に、そして愼教授の紹介で安秉直教授にお目にかかることになったのである。(ソウル留学は1982年度に実現した。実際に私をソウル大学校経済研究所客員研究員として認めていただき、担当していただいたのは西洋経済史専攻の研究所所長の金宗鉉教授であり、在留期間延長申請に際して保証人になっていただいたのは労働経済学専攻の裴茂基教授であった。その他、当時お世話になった人々の親切を私はずっと忘れることがないだろうと思う。)

ソウル大学で一年余りの留学期間を過ごした間、最も多くの対話の機会を持ったのは安秉直教授であった。安秉直教授の大学院ゼミナールへの参席を認めていただいて、若い研究者たちとの討論の機会を与えていただいたし(当時大学院に在学中であった彼らの中から、現在韓国経済史研究家として名の知られた学者がどれほど多く輩出したかを見ると、まさに驚くべき事実であると言うほかない)、時には飲食店で酒杯を傾けながら、また別の時には冠岳山の麓のキャンパスを散策しながら、韓国社会について実に多くのことを教えていただいた。私がそれらの内容をどの程度正確に理解したかは、勿論別の次元の問題であるが、何れにせよ私が現代韓国社会についての認識の枠をつくって来る過程で、当時安秉直教授から受けた影響が最も大きな位置を占めて来たことは否定出来ない。

それだけではない。もともと大塚久雄先生のもとで経済史を学んだ私が、大塚先生の局地的市場圏の理論を援用して理論構築をしているように見えた朴玄埰教授の民族経済論に対して関心のあることを話題にすると、朴玄埰教授と会う機会をつくって下さったのも安秉直教授であったし、それから三年後に私が安秉直教授と共同編集で日本で〈韓国現代社会叢書〉を刊行したときに、韓国を代表する知識人として姜萬吉教授・朴玄埰教授に加えて李泳禧教授と白樂晴教授を紹介していただいたのであった。今でも私はソウルに行けば必ず連絡を差し上げたり、会いに出かけたりする素晴らしい知識人を知人として持っていることを誇りにしているが、考えて見るとその大部分が最初は安秉直教授を通して知り合った人達なのである。

勿論、だからと言って安秉直教授に紹介していただいた人々が、韓国社会の現実について同じ考えの人達であつというわけでは、必ずしもない。その当時から、安教授は例えば朴玄埰教授の主張する民族経済論は理解しにくい理論であると、率直な疑問を語っておられた。それにもかかわらず、韓国社会の民主化のために、韓国民衆の生活と人権向上のために、さらには韓半島の統一のために、大きな枠組の中では志と行動をともにする方々を紹介していただいたものと、私なりに考えていたのである。その当時の安教授のお話のなかで一番印象的であったと記憶するのは、「韓国民族主義の究極的目的というのは、逆説的にきこえるかも知れないが、民族主義の必要性を無くするところにあるのかも知れない。私たちが今対話しているように、お互いに日本人だ韓国人だと意識する必要のない関係、そのような社会を目指すのが、民族主義の目的ではないかということだ。しかし、そのような目標を持っているからこそ、歴史の現段階においては私は韓国民族主義に固執しなければならないと考える」という言葉であった。私が韓国を学問研究の対象としてから最初

に設定した主題が、〈民族経済論〉〈民族史学〉〈民族文学〉などを、歴史形成の主体を民衆に求めようとする抵抗的民族主義としての韓国民族主義の大きな流れの中で統一的に把握しようとするところにあったから（拙著『韓国民族主義論序説』影書房、1984年、参照）、その言葉から受けた深い感動を今も生き生きと記憶している。その記憶は私の韓国留学記である拙著『ソウル讃歌』（田畑書店、1984年、集英社文庫、1988年）でも紹介したことがあるから、感動の深さを理解していただけるものと思う。

私は当時から安秉直教授を尊敬していたし、その後もずっと尊敬して来ており、今も尊敬している。この文を読む方々に、何よりも先ずこのことを理解していただきたいと思う。学問的立場に何らかの距離が生じたからと言って人格的信頼感まで失うとすれば、それほど愚かなことはないであろうし、安秉直教授も私もそのような愚かな人間ではないと信じるからである。この間、私が個人生活上の悩みについて安秉直教授を尋ねて相談したこともあったし、1995年のはじめ、大震災直後にわざわざ神戸まで来て激励して下さった安教授の暖かい御厚意も忘れることが出来ない。

2.

私が安秉直教授の研究方法について距離感を覚えるようになったのは何時ごろからだったか、正確な記憶はない。安教授が東京大学客員教授として来日された直後ではなかったことは、たしかである。日本での在留がかなり長期にわたって、京都大学の中村哲教授たちとの共同研究プロジェクトをスタートさせた後に、安教授の社会科学方法論が徐々に変化し始めたように記憶するからである。

この類の話題は、韓国の知識人の間で厄介な論議の対象になり得る、多少微妙な問題に触れることになるかも知れないし、事実、時にはとんでもない誤解を生んで来たことがなかったわけではないので、私自身の立場を明確にしておくために敢えて一言記しておけば、安秉直教授が中村教授の影響で思考様式を変えるに至ったと考えるのは、それこそ余りに単純な見方であろう。事実、その共同研究プロジェクトが出発した初期には、私も故梶村秀樹教授も研究メンバーとして参加していたのだし、その時の討論記録も書物として出版されているのである（『朝鮮近代の歴史像』日本評論社、1988年）。

およそ学者である限り、自己の理論を発展させるためには常に他の学者の理論や業績を学ぶべきであるのは、あまりに当然のことである。安秉直教授が日帝植民地時代における朝鮮の社会経済に関して中村教授たちと共同研究を進める過程で、中村教授の理論に影響されたとすれば、そのこと自体は至極自然なことである。しかしながら、それは何処までも安秉直教授自らが新しい理論或いはパラダイムを構築されようとする学問的苦闘の過程として見るべきであり、単純に他の学者の理論を一方的に受け入れたものと理解すれば、絶えず新たな学問的地平に向かって努力されている安教授を侮辱することになるだろう。

何れにせよ、私はこの間に生じた安秉直教授との学問研究方法に関する距離感を率直に記すことによって、そのことが持つ社会科学のパラダイムにおける意味を考えて見ようと思う。言い換えれば、この頃韓国でやや複雑な論議の対象になっているように見えるような、日本の学者誰それに影響されて安秉直教授が考え方を変えた云々という次元ではなく、私の視角から見たままに〈安秉直社会科学の変化〉を考えて見ようと思うのである。

前提としなければならないのは、この間、私自身の社会科学方法論もまたそれなりに変化して来たという事実である。遡って思い出して見ると、安秉直教授に初めてお目にかかった当時においても、私は〈現実（現存）社会主義〉をある程度は肯定的に評価したい気持を持っていたように思うし、〈スターリン主義〉に対する強い反発にもかかわらず、東ヨーロッパやソ連の社会主義があれば急速に崩壊するとは全く予見出来なかったのが事実であった。時期的にさらに遡るが、中国で〈文化大革命〉が起きた時、それがスターリン主義を打破する民衆運動であることを期待して見たこともあったのである。

そうであるだけに、ここでは社会主義についての評価や認識にかかわる問題については論じないことにする。社会主義やマルクス主義をどう見るかという点は、この間、私と安教授の対話における主な焦点のひとつであったが、それは現代社会を生きる社会科学徒としてあまりに当然のことであり、またこの点に関する限り私は安秉直教授ととりたてて異なった考えを持ってはいなかったように思うからである。ひとつだけ付け加えれば、大塚久雄教授のもとで社会科学方法論を学んだ私よりも、安教授の場合、認識論として史的唯物論の正統的立場に確固とした確信を持っていたらしく見えたが、おそらくその点は現在でも変わらないものと思う。

正直に言えば、私はこのような文章を書きたくはなかった。安秉直教授の学問が何か大きく変わったということが日本でも時折話題になるようになって、私が日本人としては安教授に近い何人かのひとりに含まれることが知られているだけに、時々私の意見を問う人がいたし、私も機会があれば自分の考えを述べながら、時には安教授に対する批判的見解を語ることもあった。勿論、直接安教授の前で異見を述べてみたこともあった。それにもかかわらず、安教授を公開的に批判する文章を書くことは、あれほど私に親切にしてください、指導していただいた安教授を裏切ることになるのではないかと、考えて来たのである。そのような考えは、何よりも客観性を重視すべき学問世界の原則に反する態度であることを知りつつである。

ところで、この度は安秉直教授の側からその機会をつくっていただいたことになった。実は、私の著書『歴史としての国民経済』（御茶の水書房、1996年）を、安秉直教授が日本の社会科学学術誌である『土地制度史学』誌上で書評して下さったのである（第158号、1998年1月）。この書物はこれまで私が書いて来た近代日本経済史や現代韓国社会に関する何冊かの書物とは異なり、個別研究論文というよりは、学部卒業当時から機会のあるごとに社会科学方法論に関して書いて来た諸論文を集めて一冊の書物にまとめたものである。安秉直教授が批判された点に私が答える形で、私の安教授に対する疑問も述べていくことが出来ると考えるからである。

以下、安教授によって批判された点を中心に論点を明確にしつつ、この間安教授が発表して来た社会科学方法論に関する論文をめぐるいくつかの問題点について、私の考えるところを記してみたいと思う。

3.

『土地制度史学』に私の著作『歴史としての国民経済』に対する書評がでるということは、編集委員会からの連絡で予め知ってはいたが、まさか安秉直教授に書いていただけるとは想像もしていなかったのが、実際に書評が掲載された最新号を手にした瞬間、私は正直に驚きもし、当惑もした。勿論、何よりもまず嬉しく、感謝したいと思った。

当惑した理由は、書評していただいたのが韓国人であったからである。何故ならば、今度の書物は日本における社会科学研究が持つ問題点を私なりに批判したい気持でまとめたものであり、ある面でははっきりとした〈歴史意識〉を提示しつつ行われているように見える韓国における社会科学研究から、我々が学ぶべき点があるということをひとつの主題としたものであったからである。

社会科学方法論について語る以前に、研究者自身の〈主体意識〉が何であるかを問うことは決して不当ではないと、私は考える。そしてその〈主体意識〉を考える時、研究者がどの国や民族に属するかが、重要な要素になると考える。勿論、国や民族ごとにそれぞれ異なった社会科学的客観性があるという意味ではない。研究者の姿勢が、みずからが属する国や民族の利益を追求する〈nationalism〉に立脚すべきであるという意味では、なおさらのこと、ない。社会科学研究においても、その目的意識が自己の民族が当面している現実から離れることは出来ないし、離れてはならないという意味である。

この点については、私と安秉直教授との間に意見の差異はないであろう。例えば、韓国がかつて〈自主的近代化〉に失敗した歴史を持つとすれば、韓国の学者にとって主たる課題は、何故韓民族にそうした主体力量が足りなかったのかを解明するところに置かれるわけであろうが、日本の学者の場合は、何故自民族が隣国が近代化することを妨害することになったのかを、当時の歴史的条件のもとで客観的に解明しようとするのが、第一次的課題になるべきであろう。（このことは、日本人が歴史に対して〈贖罪意識〉を持つべきであるという次元で言うのではない。歴史に対する〈責任意識〉と学問研究における〈主体意識〉は深い内面的関連を持つにしても、両者を同一の次元のものとして混同することもあるが、常に警戒しなければならない点である。）一言で言えば、〈歴史認識〉というのは、一面では誰もが認めざるを得ない客観的に明らかにされた歴史的事実に根をおろしていなければならないのは余りにも当然であるが、他面では研究する主体が属する共同体や階級、或いは団体や組織に対する自己確認（identity）から自由ではあり得ないということである。

この場合、identityの対象が必ず国や民族でなければならないというわけではないことは言うまでもないが、同じ主体だとしても、如何なる具体的な問題について論じる時の目的意識であるかによって、その対象が変わり得るということもまた、確認されなくてはならない。

アメリカのある大統領が国民を前にして、「アメリカ（国家）が自分のために何をしてくれるかを考える前に、自分自身がアメリカ（国家）のために何をなすことが出来るかを考えよ」と演説したことがあったというが、国民たちが果してどの程度アメリカ国民としてidentityを持っているか、そして大統領の持つ権力としての正統性を認めているかを確認せずにそのように語ったとすれば、それこそ誤った考え方だと言わなければならない。

そのような言い方は、アメリカの一般国民がみずから進んで語ったとき、初めて正当性を持つことになるであろう。

別の次元で少し述べてみようと思う。私は実は、日本ではそれほど多くないイエスを信じる〈クリスチャン〉の一人であるが、私自身をふりかえって見ればクリスチャンとしての正しい生活態度をまもっているとは言えないし、この世の中に実際に存在する〈キリスト教教会〉がイエスの教えた思想のうち最も重要な〈隣人愛〉に背く行いを重ねているのではないかといつも感じつつ、私なりに悩んでいる者である。ところで、もしクリスチャンでない誰かが私を見て「おまえの生活態度はクリスチャンに相応しくなく不道德的だ」とか、キリスト教会の実態を見て「ひどく堕落した」とかみだりに言うとしたら、私はそうした批判を拒否するであろう。どのような組織や団体、あるいは共同体に属するかにかかわらず、市民社会で公認されたルールをまもっている限り、その組織や共同体の中での内部的な正さや誤りを判断できるのは、その組織や共同体に identity を持つ人間に限られるからである。Communist でない人が、ある共産主義者を相手に、「おまえの行動は communism に矛盾している」とは批判できないわけであろう。

本筋でないことを長々と述べて来たようである。要するに、人間の持つ identity は多様な次元で成立するわけであるが、ある具体的な問題をめぐって論争しようとしたら、その次元における identity を互いに認識しつつ行うことが、生産的論争を可能にするであろうということである。安秉直教授と私は、社会科学を、しかも大きな枠組においてはどれも政治経済学的視角を持って近現代史や現代資本主義社会を研究するという次元では同じ identity を共有しながらも、安教授が韓国社会に属していらっしゃるとすれば私は日本社会に属するという次元では、identity が異なるのである。

安秉直教授が拙著を書評して下さったという事実を知って、私が心から嬉しかったのも、当惑したのも、同じ理由によったのであり、それこそまさに、ここで論じて来た identity の問題に由来したということである。

4.

前置きが長くなった感がなくはないが、ここから本論に入ろうと思う。

安秉直教授は書評の冒頭で、私がこの間かなり多くの書物を出して来たとして、それは「この本で強調しているところの近代的職業倫理の実践であろう」と、褒めていただいている。学問的業績というのは論文や書物を多く書けばよいというものではないことは私も認識しているから、この言葉に感謝しつつ、これから一層努力するようにという激励の意味で理解したいと思う。

安秉直教授は続けて、拙著であるこの論文集が二つの主題を集中的に扱っているとして、それは「著者がその恩師である大塚久雄教授から引き継いだ研究テーマである〈産業構造的に均衡のとれた自立的国民経済〉と、資本主義の形成と〈合理的経営を生み出すような経済倫理〉とのダイナミックな関係、まさにこれである」と指摘される。このように正確に読んでいただいたことを、感謝したいと思う。

ところで安教授は、そのような問題を中心課題としたのは先進資本主義社会を指向してきた〈跛行構造型〉の後進資本主義であった日本の学者としては当然であるとしつつ、し

かし「いかなる形態の資本主義も、また国民経済すらも自国の経済体制として持つことの出来なかった韓国人研究者たちが、この本で著者が紹介しているところの『民族経済論』、『資本主義萌芽論』、『植民地商業資本主義時代論』、及び『儒教資本主義論』の国民経済や資本主義をなぜ自らの研究テーマとして受け入れているのか」について、「奇妙に感じられる」と指摘する。そして著者である私が韓国におけるそのような研究に注目するのは、〈トータルな思想の問題〉としてそれらを理解しようとするからであろうとして、「この点がこの本を正しく理解するためのキーポイントだと思う」と述べる。

実は安教授が「奇妙に」感じるというのは、書評の最後の部分で明らかになるように、そのような理論を自分のものとして受け入れた韓国人学者であるというよりは、韓国人学者のそうした態度を〈思想〉の次元で肯定的に見ようとしている私自身であることには、疑問の余地がない。私としては、かつて安教授自身がそのような学者の一人であったという事実を、ここでこと新しく指摘したいとは思わない。しかし、ここでの安教授の言葉の中には、少なくとも見過ごせない二つの問題が含まれていると考える。

ひとつは、大塚教授を始めとした日本人研究者たちが、果たして「先進資本主義を指向して」上述のような理論構築を試みたのであったであろうかという問題である。そのような指向性の人もいたであろうと、私も思う。そして大塚教授の研究姿勢が、一部の人々からは「階級関係を捨象したまま、西ヨーロッパ資本主義を理想化した近代化論」であるという批判を受け続けて来たこともまた事実である。しかしながら、私自身を含めてであるが、私たちは日本がイギリスのような先進型の資本主義になることを目指して来たわけではないし、そうなり得ると考えて来たわけでもなかった。後進資本主義としての日本社会が抱えている問題を解明することによって、ドイツのようなファシズムに向かう道を防ぐと同時に、〈新しい社会に向かう改革の課題〉を発見しようとするのが、私たちに共通した問題意識であった。〈新しい社会〉が現実社会主義を意味していなかったことは言うまでもないが、だからと言って私たちが模索した視野の中に〈社会主義〉が全く入っていなかったのではない。研究者の間に何らかの明示的な合意が成立していたわけではないにせよ、〈封建制から資本主義への移行〉を主題としながら、私たちは〈近代化のもうひとつの類型〉として社会主義について考えていたし、言ってみれば〈スターリン主義が成立し得ない人間的社會主義〉への指向もまた、視野の中に持っていたのである。

戦後のある時期からは、ソ連をはじめとする現実社会主義が余りに非人間的な民衆支配をほしきままにしているという事実が広く知られるようになり、それが単純にスターリンという独裁者個人の性格に由来すると言うよりは、〈プロレタリア独裁〉が必然的に作りだした官僚主義と結び付いた構造的な問題であることを認識するに至った多くの日本の学者は、如何なる形態であれ〈新しい社会〉は人権と民主主義が尊重される社会でなければならないことを強調するようになっていた。そのような考え方のもとに、広い意味で〈市民社会派〉と呼ばれたりもする学問の流れが形成されたわけであるが、そこにおいて〈西ヨーロッパ市民社会〉の物質的あるいは精神的基盤を研究して来た大塚久雄教授をはじめとする〈比較経済史学派〉が、一定の役割を占めていたのである。

勿論、〈社会主義崩壊〉以後、〈市民社会派〉の学者たちのなかのかなり多くの人々が、社会科学のより新しいパラダイム構築を目指して苦闘しているのは、事実である。ところで、安教授は東京大学客員教授として在留された間に大塚教授の影響を受けて社会科学の

学徒として育った人達と相当深い交流をされたと聞いているが、そうだとすれば、私たちの社会科学が本来持っていた上述のようなimplicationを御存知でないはずがないであろう。いかに〈現実社会主義〉が崩壊した時代とはいえ、私たちの問題意識を単純に近代化論であるかのように歪曲されるのは、いかがなものかと思う。

いまひとつは、韓国が「いかなる形態の資本主義も、また国民経済すらも」持つことが出来なかったという言葉に対する疑問である。ここには〈資本主義〉が〈国民経済〉よりも上位概念であるかのような表現があるので、概念上若干の混乱があるように見えるが、その点については論議しないことにしよう。何よりも大きな疑問は、安教授が相手の立場を省察する前に、論争の対象についての自分の意見を自明の前提として論議を始める点にある。

私自身は韓国資本主義形成期についての具体的研究をしたことはないから、この点についてあれこれ発言する資格はないかも知れない。それでももともと経済史を専攻していたために、韓国に対する特別な関心を持つ以前から〈韓国資本主義形成史〉のような内容の専門書籍は、日本語の書物に限定されてはいたが機会のあるごとに読んで来ていたし、韓国語を学んでからは金容燮教授の〈経営型富農論〉や金泳鎬教授の〈時代区分論〉、金俊輔教授の〈初期資本主義論〉などを読むことで韓国研究を始めたという体験がある。かつての日本における〈マニファクチュア論争〉での服部之総の学説を支持して来た私が、いわゆる〈資本主義萌芽論〉にまず関心を持ったのは、見方によっては至極自然なことであつたであろう。

言う迄もないことであるが、この場合、私はそれらの人々の研究成果を〈思想として〉学んだのではなく、実証的研究成果として学んだのである。勿論、例えば〈民族史学〉の持つ問題意識が如何なるものであるかを知りたいと思って読んだ姜萬吉教授の『分断時代の歴史認識』（創作と批評社、1978年）のなかに、「朝鮮後期における商業資本の変化」という論文が収録されているのを見て、韓国における歴史研究が常に時代が直面している社会の現実の上で行われているという事実、大きな感動を覚えるということはある。しかし、だからと言って「思想的に立派な学者が著した論文であるから学問的内容も正しいであろう」と考えたことはない。上記のような学問的業績に接するとき、私の評価基準はやはり何処までも科学的厳密性如何にあったのは、余りにも当然のことであつた。私の能力不足のために、その〈厳密性〉がどの程度確実なものであったかについては自信がないとはいえ、である。

具体的な論点に即して論ずる余裕はないし、その当時から私が学んで来た狭い範囲の知識に過ぎないが、韓国が「如何なる形態の資本主義も、また国民経済すらもつくりあげることが出来なかった」と安教授が一方的に断定されることに対しては、疑問を感じざるを得ない。旧韓末期までに韓国資本主義が内在的にどの程度まで発展していたのか、それに対応して社会経済構造が近代社会に向かってどのような変化を示していたのかについては、当然研究者の間に見解の差異があるだろうし、ましてそれが同時代の日本や中国と比較してどう評価されるか等は、これから多くの研究を必要とする課題であろう。私もこの書物に収録した梶村秀樹教授の業績を批評した論文の中で、〈資本主義萌芽〉の問題に関しては、梶村教授の見解よりもより一層積極的に評価できるのではないかという私なりの

意見を述べていたのである。

今になって考えて見ると、資本主義の形成や近代社会に向かう歴史的条件について論じるとき、私たちは余りにも〈下からのブルジョア的発展〉の存在如何に関心を集中させ過ぎて来たのではなかったかと思われなくてもない。東アジアの場合、中国を中心とした冊封体制の枠の中であつたとはいえ、東南アジアなどの他の地域に比べて、前近代における国家形成がはるかに進んでいたという事実も重視すべきではないだろうか。安秉直教授自らが主張する〈小農段階論〉も、同様の文脈における問題提起として理解出来るかもしれない。

何れにせよ、安秉直教授が近年主張する、近代に入る直前の朝鮮社会が、自主的に近代に向かおうとする何らの力も持たない遅れた社会であつたという見解は、安教授本人のこれまでの研究成果によって否定されているのではないかと考える。

5.

安秉直教授は続けて、書評していただいた拙著の内容と構成について簡略に紹介しつつ、収録された「各論文は互いに遠く離れた相異なる時期に執筆された」ものだが、「そこには一貫した問題意識が横たわっていることがわかる」とされ、収録された論文 10 編中 8 編について、具体的論点を紹介しながら論評される。意見の相違はあるにせよ、私が主張しようとしたことの意味を極めて正確に紹介して下さったことに対して、心から感謝したい。即ち、論文「アメリカ資本主義生成期と資本主義の『精神』」については、「『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』における『資本主義の精神』に対する正しい理解方法を提示」しているとされ、次の論文「いわゆる『儒教資本主義論』について」では、「東アジア NICs、中国及び ASEAN の経済発展とともに登場した『儒教資本主義』論者たちが、儒教一般が資本主義生成における生産力的基礎となる」と主張することの誤りであることを論証したとされる。今、私がこの文章を書いている主な目的は安教授との意見の相違を明らかにしようとするところにあるわけだから、私の主張を支持していただいたことに論及するのは避けたいが、特にこの〈儒教資本主義論〉の部分は日本で私の周囲の学者にその意味を殆ど理解されなかったということもあって、安教授が正確に私の主張の意味を理解して下さったことについては、特別に感謝の気持ちを表したい。論文「日本の経済発展と民主市民教育」に対しても、「戦後日本の民主市民教育が、——（中略）—— 内的反省が不足し、結局『《個》』の人格的自立への指向よりは、「集団の一員としての個人」という側面が強調される』『会社主義』に適合した教育になったと批判した」と私の主張を紹介しつつ、大体において肯定的に評価していただいた。

論文「内村鑑三と国民経済」「内村鑑三における国民経済形成の主体」に対しては、「国民経済の精神的基盤を国民各人の経済的独立に求めた」「産業構造的に均衡のとれた国民経済を形成」しようとした明治時代の日本の知識人が持った国民経済形成のための構想の一つの事例を紹介したものとして理解するとしつつ、「このような内村の国民経済論が大塚久雄教授によって継承・発展された点は、韓国人研究者たちにとっては大変興味深い」と述べて下さっている。韓国においても 1960 年代以来広く知られて来た大塚史学のルーツのひとつを紹介したわけであるが、私のこの二論文が韓国における大塚史学理解に多少

なりと役立ったとすれば、私自身まことに光栄に思うところである。

論文「〈内在的發展論〉と〈内在的視角〉」は、私の書いた、故梶村秀樹教授の遺稿を編集した『梶村秀樹著作集』の第3巻（「近代朝鮮社会経済論」）と第5巻（「現代朝鮮への視座」）への書評を論文形式に改めたものであるが、この論文に対して安秉直教授はかなり批判的である。安教授は「周知の通り、梶村教授の内在的發展の視角は帝国主義的侵略に抵抗する朝鮮近代史の内在的發展法則を究明しようとしたものであり、筆者（安教授）は著者（瀧澤）が『内在的發展論』の代わりに内在的發展法則を除去した『内在的視角』を提示するのが朝鮮近代史研究においてどのような意味を持つのか疑問を持たざるをえない」と指摘される。

この部分に関する限り、安教授は私が述べた〈内在的視角〉について若干誤解されたのではないかと思う。私は〈内在的發展論〉の持つ意味を否定したことは一度もないし、それどころか、前述の通りこの論文の中でも、梶村教授が示した資料の数字を私なりに加工して、旧韓末期の韓国における〈資本主義萌芽〉は梶村教授が想定していたよりは更に高い段階にまで到達していたのではないかという疑問を提起したつもりであった。開港期以前に朝鮮社会が近代社会形成に向かってかなり高い水準の〈内在的發展〉を成し遂げていたと見るのが、私が朝鮮近代史を見るときの基本的立場なのである。とはいえ、正直に言って私はその時代の朝鮮社会に関する実証的研究の経験がないため、それを専門領域とする研究者たちの研究成果を学びながら、こうした判断をしているに過ぎない。私が述べた〈内在的視角〉の重視というのは、如何なる社会であれその社会を正確に理解しようとするれば、ただ外側から見るのではなく、その内部構造と固有の運動法則を内側から、まさに〈内在的〉に把握しなければならないということである。したがって、それは決して〈内在的發展論〉と対立する概念ではない。

私がこの論文において〈内在的視角〉と〈内在的發展論〉が異なった次元の概念であることを強調したのは、以前に拙著『韓国の経済発展と社会構造』（1992年、御茶の水書房）を書評して下さったある在日韓国人研究者（文京洙氏）が、このふたつの概念を区別しないで私をあまりに過大評価されたことがあったからでもあった。

ところでいささか奇妙に感じられるのは、ここで安秉直教授が、梶村秀樹教授が主張した〈内在的發展論〉を至極自然に認めておられるように見える点である。これは、「朝鮮社会は自分の力では到底近代社会をつくりだせなかった」という、近年安教授が強調されていることと矛盾するのではないかと気になる。

6.

批評していただいた残りの二篇の論文に対して、安教授はきわめて批判的である。当然そうならざるを得ないのは、安教授と私の意見の差異がまさにここに集約されているからである。

論文「レーニンの『アジア社会』観」は、思想史や学説史を研究対象としていない私が、東京大学の博士課程に在籍中に〈スチューデント・パワー〉全盛期にぶつかって本来の専攻である日本経済史研究に取り組めない状況のもとで、マルクス・レーニン主義思想を多

少なりと正確に理解したいと考えて読んだレーニンの著作のなかから、アジア社会の認識にかかわる部分に注目して私なりに整理して見たものであった。この論文を実際に執筆したのは1969年であったが、発表したのは1970年であった。その当時、日本の社会科学界ではマックス・ヴェーバーやマルクスのアジア社会認識に関して、いわゆる〈アジア的生産様式〉の問題とも関連させつつかなり活発な論争が行われていたのであるが、そこにはおそらく、〈学園紛争〉の過程で赤裸々に暴露された大学社会を始めとする日本社会が不治の病のように抱えている官僚主義の本質が何に由来しているのかを解明しようとする問題意識と、その時期がまさに中国での〈文化大革命〉の時代であったことから、〈毛沢東思想〉を武器として打破しようとしている（かに見えた）〈アジア社会〉の本質が何であるかを知ろうとする問題意識が重なっていたと言うことが出来るのではないかと思う。言ってみれば、当時の我々の社会科学は、〈市民社会〉と〈アジア社会〉を両極に置いて、如何にすれば〈アジア社会〉を克服して〈市民社会〉へと進むことが出来るかについて、深刻に模索していたと言えるかも知れない。

安教授はこの論文で私が主張した内容を、「レーニンがアジア的生産様式やアジア的共同体等の『アジア的なもの』を、実践においては明らかに顧慮していたが、それを理論化することができなかったために、社会主義建設において『市民社会』が国家の中に埋没する結果を招来したと批判する。一方、第一次世界大戦後のレーニンのアジアに対する認識は、『腐朽化しつつあるヨーロッパ』に対して『革新された中国』、『アジアの目ざめ』及び『先進的なアジア』等、アジアが世界史形成の主體的担当者として登場したことを最大限に強調したと指摘した」と要約されているので、内容についてここで改めて触れる必要はない。ところで安秉直教授はこのように論文の論旨を正確に紹介された後、次の様に批判を加えられる。

即ち、「筆者（安教授）の考えによれば、『先進的なアジア』が、結局は失敗した中国革命に帰結してしまったという今日の状況を考慮すると、上のようなレーニンのアジアに対する認識転換をどのように受け留めたらいいのかに対するより深い理解が必要ではないかと思う」とおっしゃるのである。見過ごしてしまえばそれほど深刻な批判ではないようであるが、この短い文章のなかに、実は大きな論争点が含まれていると思う。

多少弁解めいたことを言うことが許されるとすればだが、この論文を発表した1970年当時、私は〈現実社会主義〉が何らかのよりよいことを成し得るのではないかという期待感を捨て切れずにいたし、〈文化大革命〉の過程で実際の様子及時折報道される〈紅衛兵全国交流〉が、もしかしたら中国社会の基礎になっている旧い〈アジア的共同体〉を新しいGemeinschaftに改造する過程ではないかという（いま考えて見れば）およそ見当違いの想像をして見たりしていたのである。

私はその当時においても〈現実社会主義〉や〈文化大革命〉の実態を把握出来ないまま、そのような論文を書いていたことを批判されれば、その点については全くのところ言い訳のしようもない。とはいえ、現時点においても〈アジア社会〉の本質が何であるかについて明確な学問的合意がないように思われることもまた事実であり、旧ソ連を始めとする各地域で〈社会主義崩壊〉以後、むしろ民族共同体相互の争いが激化している現実を見れば、いまこの時代こそ、血縁制的紐帯の原理と家産制官僚国家の専制支配という特徴を持つ〈アジア社会〉克服に向かう道を、真摯に模索すべき時代ではないかと思われる。この論

文をこのたびの拙著に収録した理由もそこにあった。

かつてレーニンが「帝国主義は資本主義の上に立つ上部構造だ。帝国主義が崩壊するとき我々が当面するのは、上層の破壊と基底の露出である」と述べたことがあったが、その言葉を言い換えて「社会主義はアジア的生産様式の上に立つ上部構造だ。社会主義が崩壊するとき、我々の当面するのはイデオロギー的支配構造の破壊とアジア的生産様式の露出である」と言えば、何程かのリアリティーがあるように見える時代だからである。

この論文を批評して下さった安秉直教授には、いま私が上で述べたような現代世界が当面するこの種の問題に、とりたてて関心がないように見える。社会科学を専攻する学者の関心が必ず同じでなければならない理由もないから、そのこと自体は問題ではない。私がここで安教授の言葉に疑問を感じるのは、レーニンの社会認識について論じながら、ロシア革命ではなく中国革命に対する評価を以って私の論旨を批判される点と、その中国革命が「失敗」であったと一方的に断定される点にある。

何故このようなことを言うのかといえば、如何に旧い社会構造を有してしたとはいえ、また先進帝国主義に金融的に従属していたとしても、それ自体ひとつの帝国主義国家として存在していたロシアとは異なって、中国は帝国主義列強の侵略によって半植民地状態に陥り、従って帝国主義に抵抗する民族解放運動と結び付いた形態で革命が遂行されたのが事実だったからである。中国を始めとするアジアの社会主義はその最初から民族主義と切り離しては考えられないということは、研究者の間で既に一般的な認識になっていると思うが、安教授の言う中国革命の「失敗」とは何を意味するのか、理解しにくい。

中国がそのまま引き続き帝国主義に支配されていたならば、民衆は今よりも幸せに暮らすことになったであろうという意味でないことは明らかであるし、国共内戦で国民党側が勝利していたら、よりよい主権国家を創り出すことが出来たであろうという意味でもないであろうからである。

行き過ぎた表現をしたかも知れない。安教授の言葉は、中華人民共和国成立以後の社会主義建設が「失敗」したという意味であることを、容易に推測出来るからである。私がここで若干難癖をつけるような表現をして見たのは、最近の安教授の発言に接すると、極端な場合にはさらに進んで安教授が民族解放闘争の意味までも否定しているという誤解が生れかねない不安になるからであった。如何に現実社会主義に問題が多いにしても、少なくともアジアの社会主義は帝国主義支配に反対する民族解放運動と連関性を持って成立したという事実を忘れるべきではないし、民族解放の持った意義を過小評価することも正しくないであろう。

ところで、ここで問題が終るのではない。安教授が中国革命を「失敗」であったと決め付ける基準は、果たして何なのだろうか。

中国社会主義が、中華人民共和国創立以後、継続して困難な問題を抱えながら今日に至った過程については、いまや多くのことが知られるようになったし、社会主義体制のもとで多数の人民が豊かな生活を享受するどころか、生産力向上のためとして〈毛沢東思想〉が主張した、現実から遊離した人間観を前提とした政策が強行されたために、とてつもなく多数の人民が生活の基盤を失っただけでなく飢え死にさえしていったという事実については、今では中国の当局者たちも認めている。物質的な生活水準だけでなく、〈大躍進政策〉時代や〈文化大革命〉時代を中心に人権侵害もまたどれほど酷いものであったかにつ

いても、最近では我々もかなり具体的に知るようになった。「それでもソ連よりはましであろう」という中国社会主義に対する我々の期待が、粉々に砕かれて既に久しい。

ところで問題は、「革命」の成功如何は、その革命が起きたときに掲げた理念ないし理想と、革命後実際に実現した現実との距離を基準に評価出来るものだろうかという点にある。〈自由・平等・博愛〉を理念として掲げたフランス革命が実際に実現したのは私的所有を原理とする階級社会としての資本主義社会であったからといって、フランス革命は「失敗」であったと考える人はいないであろう。「尊皇攘夷」を叫んだ倒幕勢力が樹立した明治政権が対外開放的な外交通商政策を採ったからと言って、明治維新変革を「失敗」と評価することも出来ないであろう。まして中国の場合、共産主義思想を受容しつつ展開した帝国主義に反対する民族解放闘争の結果成立した中華人民共和国という主権国家が今も厳然と存在しており、〈プロレタリア独裁〉（実は共産党一党独裁）という体制を維持しながら、いまや〈社会主義市場経済〉の旗の下に急速な経済成長を主導している。

〈社会主義市場経済〉などというものはあり得ず、その概念自体が矛盾であると主張する人もいるが、奴隷制社会であれ封建制社会であれ、如何なる社会構成体においても、程度や範囲は別にして市場の機能があってこそ、その社会における主たる生産様式が成立することが出来るという歴史的事実を認識する限り、〈社会主義市場経済〉なるもの自体が本来存在し得ないとするのは、明白な理論的誤りであると言わなければならない。勿論、だからと言って現在中国で実際に展開している〈社会主義市場経済〉が社会主義的社会構成の中で市場経済的要素を効果的に利用していると言えるのか、或いは実際には市場経済の原理が基礎となった社会を単に共産党が支配しているというのが実態なのか、現在のところ何らかの結論を出すのは難しい。（率直に言えば後者の感が強い。）

いずれにせよ、現在中国が急速な経済成長過程にあることは、間違いのない事実である。そしてそれは、大きく見れば、〈毛沢東時代〉から断絶された過程であると同時に、国家機構や指導者、理念や思想の面において〈毛沢東時代〉を継承していると見るべき面もあると考えられる。（小島麗逸『現代中国の経済』1997年、岩波書店、参照）

安秉直教授が「中国革命の『失敗』」を言うとき、それは毛沢東の自力更生路線が失敗したという意味なのか、最近成し遂げられた経済成長も含めて失敗と見るのか、明確ではない。文脈からすればおそらく前者の意味であろうが、そうだとすれば「中国革命」がそもそもなかったとしても後者は可能だったという論理になるであろう。近年になって、朴正熙政権の経済政策が韓国経済が高度成長するうえで効果的に貢献したという面を積極的に評価され、さらには日本帝国主義の植民地支配が経済成長のための前提条件をつくり出したという面を認めるべきだと主張される安秉直教授の場合においても、（たとえ分断された体制であったにせよ）植民地支配から〈解放〉されない状態においても高度経済成長が可能であったであつたらうとはお考えではないであろう。中国民衆の立場からすれば「中国革命」がまさに〈解放〉に当たる歴史的意味を持ったと思われるのだが、何故それを「失敗」とだけ評価されるのか、果たしてそれが正確な歴史認識であろうかを、疑問とせざるを得ない。

7.

拙著に収録した論文の中で安教授によって批判されたもう一篇は、「民族経済論の理論体系 — 朴玄埰経済学を理解をめぐって —」である。もともとこの論文は、韓国の学者の中で私が最も大きな影響を受けた朴玄埰教授の回甲（還暦）を記念する論文集のために韓国語で執筆したものであり、「ひとりの日本人が見た民族経済論」の題で『朴玄埰先生回甲記念論文集 民族経済論と韓国経済』（創作と批評社、1995年）に収録されている。この論文集が出版された直後に朴玄埰教授が逝去されたため、まことに悲しいことに、この論文は私が朴教授を追慕する意味を持つことになってしまったものであった。

安秉直教授は、この論文が「この本の中で最も難解な論文である」とされ、つづけて「筆者（安教授）の理解によれば、朴教授の民族経済は民族運動の物質的基礎として構想されたものであるが、著者（瀧澤）はそれを『存在としての民族経済』と『当為としての民族経済』という二つの側面から理解しようとしている。著者が朴教授の民族経済論を『共同体と市民社会』の物質的基礎として理解することに対しては同意しにくい」と述べている。

民族経済論については、ずっと以前から安教授と私の間に大きな意見の相違があったし、直接対話の場で論争したこともあったから、私の民族経済論の理解を安教授が批判されるのは、至極自然のことと思う。ひとつ残念な点があるとすれば、安教授がここで民族経済論自体を批判していらっしゃるのか、民族経済論に対する私の理解の仕方を批判しようとするのか、明瞭ではないことである。安教授の文章を素直に読めば後者のようであるが、元来安教授が民族経済論に対して極めて批判的立場であったことを考えれば、ここには上述のふたつの意味がいずれも含まれていると見るべきであろう。言ってみれば、そもそも間違った理論を私が更に歪曲して、誤まって理解しているという指摘であろうと理解する。

ところで、ここで安教授が指摘された内容の中には、若干誤解も含まれていると思う。その点を指摘することによって、民族経済論に対する私の理解を整理しておきたい。

安秉直教授が、「民族経済は民族運動の物質的基礎として構想されたものである」と指摘されたことについては、私も同意する。しかし、私が朴玄埰教授の民族経済論の持つ理論構成を論理的・一貫性のあるものとして理解しようと努力した結果、そこには民族経済が民族運動の基礎になるという論理と同時に、民族経済が持つ民族性は民族運動によって規定されるという、一種の「循環論理」があることを見出したのであったし、朴教授自身もその問題点をある程度自覚されていたからこそ、「存在としての民族経済」と「当為としての民族経済」という新しい概念設定をされるに至ったものと理解している（朴玄埰「民族経済と国民経済」『韓国社会研究』第4号、ハンギル社、参照）。そうだとすれば、安教授が「存在として」或いは「当為として」の民族経済をあたかも私が自ら勝手につくった概念であるかのようにおっしゃるのは、誤解であることが明らかになるであろう。

この論文において、朴教授が新たな概念を提起しつつ民族経済論をより高い次元で再定立しようとした意味について、私は次のように考えて見たのであった。「この論文（朴玄埰、前掲「民族経済と国民経済」）において朴玄埰氏は、民族経済概念には歴史的所与としての『存在としての民族経済』と、国民経済の自主・自立を保障する自律的再生産構造という『当為としての民族経済』が含まれ、前者はさらに『本来的な民族経済』と外国資

本に従属した状態での『副次的民族経済』に分けられるが、それらの間には、『副次的民族経済』は『本来的な民族経済』を指向し、それは更に『当為としての民族経済』を指向するという『同心円的關係』が成立すると述べている。我々なりの視点で朴玄埰氏のこの議論を整理し直してみれば、ほぼ次の様に言うことが出来るであろう。――（中略）―― 即自的（an sich）な民族経済は歴史の具体的状況のもとでは必ずしも国民経済の再生産的自立の基礎となるものではなく、『副次的民族経済』にとどまっている場合もあるが、しかし、そうした状況においても、他方では、一定の市場的基礎を持った『本来的な民族経済』は存在し得るし、『副次的民族経済』もそれが民族経済である以上、『本来的な民族経済』と市場的関連を持つことを指向するはずである。こうして実際に存在する『存在としての民族経済』が、やがて自立的国民経済の基礎となる『当為としての民族経済』を指向して行くことになる（für sich な民族経済）ということである。」

実はここで私が注目したのは、「副次的民族経済」が「本来的な民族経済」を指向するようになり、「存在としての民族経済」が「当為としての民族経済」を指向するようになるという場合の、その根拠なり必然性についての説明がなされていないという点であった。朴教授の主張を注意深く検討してみると、それも結局は民族主義運動によって保障されるという論理になる。私が朴玄埰教授においては「民族経済」と「民族運動」が＜循環論理＞になっていると述べたのは、この意味においてであった。

結局ここで私の言いたかったのは、朴教授が民族経済論をより高い次元に引き揚げようとする理論の構築過程で若干の理論的困難を招いたという事実についてであって、私が自ら新しい理論を開発して朴教授の理論に対峙しようとしたのではなかったのである。安秉直教授がどうしてもそんな的外れな誤解をされたのか、私には全く理解出来ない。もともと安教授は民族経済論に批判的であったうえに、数年前から〈韓国＝中進資本主義〉論を主張されるに至った以後は、以前にも増して民族経済論の類の理論への拒否感がより強くなったのであろう。拙著の他の論文に対する批評とは異なって、この論文については、拒否感が先に立って内容を詳細に読んでいただけなかったのではないかとすら感じる。

安秉直教授が私を批判された「共同体と市民社会」の問題についても、多少の検討を加えておきたい。民族経済論を、その元来の枠組のまま主張するには、世界史の動向が余りにも大きく変化してしまったという認識を、私も持っている。朴玄埰教授の考えと距離が生れることを予め覚悟しながら、民族経済論の持つ本来の意義を生かす方向として「共同体と市民社会」の問題を設定したということは、私がこの書物の「はしがき」に記した通りである。

何故「共同体と市民社会」かと言えば、前近代社会の基礎となって来た古い共同体が、資本主義社会における〈人間疎外〉から真の人間性を回復させることが出来るという、一部の論者の主張が誤りであることを確認すると同時に、市民社会における新しい人間連帯を指向することにおいて共同体が持っていた直接的な人間関係（Gemeinschaft）を蘇生させることが、より人間的な社会を創造して行こうとするときに、意味があるからである。周知の通り、この問題はロシア革命当時に、レーニンを始めとするマルクス主義者といわゆるナロードニキの間で行われた論争の主題であったが、ザスーリッチ宛てのマルクスの手紙において、皮肉なことにマルクス自身はナロードニキに近い立場を表明

していたということも、広く知られている。私自身もまた、資本主義がもたらした人間疎外を克服する道を模索する過程で、この問題は必ずや真剣に検討されるべき課題になると考えて来た。プロレタリア独裁だけが社会主義体制ではないこと、むしろそれは社会主義の原理を歪曲する極めて特殊化された支配体制であったことが明確になった現時点では、この問題は以前よりもはるかに現実性を感じさせているのではないだろうか。

朴玄埰教授の民族経済論において市民社会論が如何なる位置を占めているかは、必ずしも明瞭でないことも事実であり、(〈強引に〉ではないが)私が民族経済論への接近においてこの理論と市民社会論を結び付けようと意図的に試みて来たのも、事実である。もし、私が朴教授本人与この問題を主題として本格的に対話する機会があったとしたら(逝去される前にそのような機会が与えられることを、私がどれほど切実に願っていたことだろう!)、おそらくかなりの意見の相違があったことであろう。その意味では、安秉直教授の批判に首肯出来る面もないではない。

それにもかかわらず、朴教授の理論の中には、その理論体系を仔細に検討して見れば、こうした接近方法も可能にする要素が含まれていることを確認出来るというのが、私の主張である。どのような思想家についての研究であれ、その思想家が自ら如何なる自己認識を持っているかをいったん離れて、その思想体系を研究者の主体的な問題意識を以って分析することによって、そこに内包されている思想の〈展開可能性〉を導き出すことが要求される。例えば、直接的に経済倫理について語った記録はないにしても、イエスの言葉を当時の歴史的状況の中で分析することによって、我々は「イエスの経済倫理観」について論ずることが出来るはずである。まして朴教授の場合、中心的な主題ではなかったにしても、機会のあるごとに〈共同体〉に関して論じて来ていたことも事実であれば、なおさらのことである。

朴教授はその論文や著作において、折に触れて上述のマルクスがザスーリッチに宛てて書いた手紙に言及しながら、共同体が新たな段階に蘇生する可能性を認めていたが(もっとも、おそらく韓国の社会科学をめぐる状況を考慮して、マルクスの名前は明記されていなかった)、その代表的な例として、次の様な文章がある。

「しかし、共同体の運命を、その私的契機による共同的契機の否定によってのみ考えることが出来るかというところから、問題が始まる。ここでは、19世紀のロシアの農業共同体についての極めて示唆的な文章が提示される。すなわち、農業共同体の発達、古代および西ヨーロッパの歴史的運動にみるように、共有から私有への過渡期にあらわれるのであるが、果たしてこの道だけが農業共同体が通って行かなければならない道なのかという疑問が提示されて、これに対して『決してそうではない。農業共同体はその構成上の形態から見て、次のふたつの道のうち一つを選択することが出来る。即ち、農業共同体のなかに内包されている〈私有の要素が集团的要素を克服するか、でなければ後者が前者を克服するか〉であるが、全ては、それが置かれている歴史的環境如何による』と答えられた。—(中略)—ここで述べられている基本的問題は、経済的な諸条件を継承している共同体的社会態勢が、必ずしも一義的に進歩に対する反動、或いは社会変革に対する反革命的根拠を意味するのではないということである。—(中略)—この様な可能性の上に、非資本主義的発展の道が開かれている。」(朴玄埰「〈共同体論〉と〈共同体運動〉」『共同体文化』第2集、1984年12月、後に朴玄埰『韓国経済構造論』日月書閣、1986年、に

収録される)。

〈ソウルの春〉が挫折した後の1980年代のはじめに、韓国の社会科学界において共同体論がひとつのブームになった当時に発表されたこの論文は、一方で前近代的共同体に対する無条件的美化論の持つ危険性を指摘しながら、他方では共同体蘇生のために「市民社会論」の持つ重要性を強調したものであった。そしてさらに進んで、現代韓国の歴史的条件下での共同体蘇生の可能性を提起した意味を持つものでもあった。その点は、次の文章を見ればより一層明確になるであろう。

「共同体的なものが存在するところにおいては、共有的契機と私有的契機を、そのなかで歴史の長期的発展に寄与する共有的契機を肯定的に活用することは、労働疎外はもちろん、近代的なものの持つ味気無さを緩和して、よりよい社会的状況と相互協力を生むことになるであろう。」「市場経済の原理に大きく依存しながらも、国民経済に計画性を与え、示された諸原則の貫徹のために共有的な性格を帯びた経済領域の拡大が、協同組合的所有（これは共同体的遺制のあるところでは、その近代的な共同所有への転化のためのものとなる）によって、試みられるのである。そしてこれを補完するものとして、国家資本主義的領域の拡大もまた必要である。協同組合と国家資本主義（国営企業）は、計画執行の重要な手段になる。――（中略）―― 計画は民衆的参与によって作成され、執行されなければならない。このことは、計画が何人かの計画立案者の所産ではなく、作成から執行に至る諸過程が民主主義的集会と手続きによって作成され、執行されることによって、大衆の参与の所産にならなくてはならないという意味である。」（朴玄埰「発展論批判 ― 新たな発展理論の模索」、同上書に収録）。

ここに引用した朴教授の幾つかの文章を見れば、それが〈朴玄埰経済学〉においてどの程度の比重を占めていたかは一応別の問題として、また民族経済論自体と如何なる理論的連関にあるのかは必ずしも明瞭ではないようでもあるが、よりよい新しい社会を指向するに際して朴教授が「共同体と市民社会」のパラダイムを持って未来社会を展望していたという事実を、確認することが出来る。安秉直教授がこの点を認められないのは、民族経済論に対する無条件的な拒否反応のためであるのか、或いはいまや〈中進資本主義〉段階にまで到達した韓国においては、「よりよい新しい社会」を構想するなどということは虚しいこととお考えのためなのか、私には判断出来ない。

8.

安秉直教授は、書評の文章を結ぶにあたってあらためて、韓国の研究者たちが追求している研究テーマを〈トータルな思想の問題〉として把握しようとする私の姿勢を、次の様に批判された。

「著者がもし韓国人研究者が追求している研究テーマの性格をこのように理解するならば、著者はなぜ韓国人研究者たちが思想的レベルにおいてではなく、方法的レベルにおいて韓国近代史を追求することのできる視角を模索しないのかわからない。著者は『歴史としての国民経済』論的視角で韓国近代史の研究テーマを扱ったために、上のような限界から抜け出すことができなかったのではないか。もし著者が『自立的国民経済』論的視角に固執せず、現実を展開している韓国資本主義をあるがままに把握するならば、そこには韓

国近代史を思想的にだけでなく、理論的にも把握することのできる客観的な法則性が存在するのではないだろうか。著者は自らこの本で1960年代以降の韓国資本主義の成立を認めながらも、強いてそれを研究テーマにしようとしないうちに、著者の韓国認識の限界が表れているのではないだろうか。これが筆者の著者に対する苦言である。」

私の研究方法の上での最も大きな弱点のひとつが理論体系を構築する能力が足りないところにあることは、誰よりも本人自身が身に沁みて自覚しているところであるから、尊敬する安秉直教授がこのような批判をして下さったことに対して、心から有難く思う。そうであればこそ、批判の言葉の中で納得出来ない部分について私なりの疑問を表明することが、批判された者としての義務であろうと考える。ここでも敢えて幾つかの点についてお答えしておきたい。

率直に言えば、ここで安教授が批判された点の中には、多少弁解したい部分もないではない。例えば「韓国資本主義自体を研究テーマとしようとしないうちに」とされる点については、私も1980年代末までの時期の韓国の社会構造、その中でも階級、階層構造に関する実証的研究を、統計資料の分析を通して試みた二冊の書物を出しているし、1990年代以降に関してもこの間に何篇かの論文を発表したことがある。特に1980年代後半から1990年代前半期の韓国社会について、限界を持ちながらも先進資本主義に従属した構造からいささかなりと脱しようとする動きを見せるに至ったと主張する論文を書いたこともあるから、韓国資本主義の現段階に関する事実認識自体においては、私と安教授との間に、それほど大きな相違はないと考えている。(韓国の研究者たちの立場からは問題提起の仕方が穏当でなかったとも言えるだろうが、安教授の〈中進資本主義論〉が前提とした事実認識には私も同意すると、公開的な席で発言する機会もあった。加藤周一・小田実・滝沢秀樹『現代韓国事情』かもがわ出版、1996年、での私の発言を参照)。勿論、私の場合には、かなり高い発展段階に至ったにもかかわらず数多くの未解決の構造的矛盾が残っていることを重視して来たから、最近の〈IMF信託統治〉時代を迎えた状態においても、一方ではそうした事態を予測出来なかった分析能力の未熟さを反省しつつも、他方では「来るべきものが来た」と考えている。したがって〈IMF時代〉も遠からず解決されるだろうと楽観的な展望を持っていらっしゃるように見える安教授の見解とは(1998年1月にソウルで直接おめにかかった折のお言葉から、そのように理解した)、差異があることも事実である。

ところで、ここでこのように弁解にもならない弁解をしてみても、何の意味もないだろう。ある書物を批評する「書評」というのは、どこまでもその書物に盛り込まれた内容を批評するということであって、その書物の著者の業績全体を批評することではないからであり、著者が反論を試みようとするれば、やはりその書物の内容を以って論ずることが要求されるからである。まして、安教授が私を批判される主たる問題点が、私が韓国人研究者たちの業績に社会科学の方法論上の問題として正面から向き合わずに、〈思想〉の次元に逃避しているという内容であるだけに、ここで方法論次元での私の立場を明確にしておく義務が与えられたと考える。

私は今も、韓国人研究者たちの業績を何よりもまず〈思想〉の次元で理解しようとする姿勢が、間違っていたとは思わない。ここで繰り返す必要はないであろうが、日本人研究者の持つべき歴史認識というのは、日本の歴史に対する責任意識を前提としてはじめて成

り立つと考えるから、日本の近現代史がアジアの隣人である諸民族に対する侵略の事実を有する以上、(韓国だけではなく) 侵略された民族の立場でなされている研究が何を問題としようとしているのかを知ろうとするのは、当然の義務であると思う。そしてそのようにしようとするれば、理論的厳密性よりも、「何が問題なのか」という〈思想〉の次元での声に先ず耳を傾けるべきであることも、やはり当然であると思う。これこそが、近現代史に対する責任意識を前提として主体的にアジアの新しい歴史形成を指向しようとするときに、日本人研究者がまもるべき原則である。もし安秉直教授がこうした私の基本的な姿勢を批判ないし否定されるのであれば、私としては言うべき言葉を失うと言わざるを得ない。

けれども、安教授が批判されるのは、上述のような単純な次元ではないであろう。安教授が心配して下さったのは、そうした私の姿勢が、「理論的に厳密性に欠けたり、矛盾がある意見であっても、韓国人による業績であれば無条件に肯定的に評価しなければならない」という態度にまで陥る可能性があり、事実既にある程度その陥穽にはまっているように見えるために、加えていただいた忠告ではないかと思われるからである。

言う迄もないことであるが、〈思想〉として持つ意味を重要視するからといって、学問的厳密性を無視してもよいということにはならない。あまりにも当然のことであり、そして私のつもりでは私なりにその原則をまもるべく努力して来たのでもあるが、安教授が書いていただいた批判の文章を読んで、もしかしたら私には学問的厳密性から逸れた安易な考え方があっても知れないと思った。これを機会にいま一度、私自身、自己の研究姿勢を反省してみたい。

そう思いつつも、次の一点だけは安教授に問いたい。安教授は私に、「現実展開している韓国資本主義をあるがままに把握」せよと忠告される。この場合、社会科学的認識において〈あるがままに〉が如何なる意味であるのか、理解し難い。私の狭い思考の範囲での言い方になるが、ある事物を見るとき、〈あるがままに〉見たからといって誰もが全く同じ形で見ることはない。如何なる問題意識で、如何なる理論や視角で、何を解明しようとする目的で見るかによって、同一の事物も様々な形に見えるはずである。安秉直教授が韓国資本主義を〈あるがままに〉見よとおっしゃるのは、中進資本主義段階にまで到達した韓国資本主義の〈発展相〉を見て、先進資本主義への従属や社会的葛藤のような側面は副次的次元の問題として見よという意味ではないだろうか。もしそうだとすれば、安教授と同じ評価基準で韓国資本主義を見る場合にのみ、それを〈あるがままに〉見たということになるであろう。

本稿は、拙著に対する安秉直教授の書評に答えるのに続いて、この間かなり複雑な論議の対象になって来た〈安秉直社会科学の変化〉についての私なりの意見を開陳したいと考えて、書き始めた。「中進資本主義論」、「経済の次元で日帝植民地統治時代が持った意味」、「朴正熙政権のもとでの経済成長の評価」、「一貫した経済成長の過程として近現代史を見ようという、いわゆる新しいパラダイム」等について考察することによって、拙著を書評して下さった安教授の問題意識をより明確に把握出来るであろうと考えてである。

ところで本稿は既にあまりに長い量になってしまった。また、ここ迄に述べた内容で、実質的にはそれらの点に関する私の考えもかなりの部分は明らかになったであろう。これからは韓国における論争に注目しつつ、何時かまた機会を得て本格的に私の意見を展開し

たいと思う。

取り立てて内容のない文字通りの拙著を、極めて率直に批評して下さった安秉直教授に、あらためて心から感謝申し上げたい。

(1998年4月)